



栃木県市町村保健師業務研究会

保健師だより

発行
栃木県市町村保健師業務研究会
平成23年3月1日
第4号

会長あいさつ

栃木県市町村保健師業務研究会 会長 小栗 澄江（日光市）

新春の候、会員の皆様におかれましては、希望を新たに、新年をお迎えしたと思います。

今年度から、会長を務めさせていただくことになりました。役員一同よろしく願いいたします。保健師の分散配置が進む中、人材育成等をテーマに、会員の意識改革等の取り組みをありがとうございました。前斎藤会長はじめ、役員の方々には、心より感謝申し上げます。

平成22年度の会員数も417名となりました。地域住民の健康問題も複雑多様化し、関係機関との連携など、市町村保健師として果たすべき役割や期待は増大しています。「みる」「つなぐ」「動かす」力の活動を基点に、今後も本会の活動の充実を図っていききたいと思います。

平成22年11月に、第29回関東甲信静地区市町村保健活動業務研修会（関プロ）を宇都宮市において開催することができました。今回の『「次世代につなぐ保健師活動とは」～紡いできた保健師マインドをいかに伝承していくか～』というテーマが、医療制度改革や分散配置など、時代を反映した内容であり、保健活動の様々な不安を一気に払拭し、保健師の専門性を発揮する糸口が再確認できたと確信しております。関プロが成功裏に開催できたことは、日常業務で多忙の中、実行委員会の方々、前会長、国保連合会の皆様、心から感謝申し上げます。2年間にわたり準備から当日、まとめに至るまで、お疲れ様でした。参加した多くの方々からは「30年目を迎えるにふさわしい内容で、実のあるすばらしい研修会でした。業務の振り返りや明日への活力になりました」と、うれしい評価をいただきました。さらに、多くの会員が県内外の仲間と情報交換会が出来ました。

ここで、会員の皆様に報告をさせていただきます。「全保協ニュース」でおなじみの、全国市町村保健活動協議会は、厚生労働省の事業仕分けにより、間接補助金である地方研修交付が廃止となりました。23年度以後も、協議会が存続できるよう事業の見直しや経費節減等、検討している状況です。この協議会は、全国の市町村保健師団体の活動や要望を国や県、関係機関・団体に声を届けるという大切な役割もあることから、本県としても、協議会の存続を願いつつ、継続加入を考えていきたいと思っておりますので、ご理解を賜りたくお願い申し上げます。

22年度のスローガンのとおり、さまざまな分野で保健師の機能を発揮しながら、本会の活動の充実と発展を図ってまいります。会員の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。



研究会活動報告

《研修・広報班》

研修・広報班 青木 きみ子（さくら市）

当班では、今年度2回の研修と広報誌の発行を計画しました。

第1回研修は、『ガッテン流！「確実に伝える」ためのワザ、教えます』～「わかりたい」「知りたい」気持ちにさせるために～をテーマにしました。第2回研修は、さまざまな部署に配属されている保健師が連携を深めると共に『保健師の役割について考える』ことを目的に、採用5年未満の保健師交流会を計画しました。

広報活動は、年1回「保健師だより」を発行し皆様にお届けいたします。会活動の周知、会員の声、情報の提供等役立つ広報を目指して発行いたします。会員の皆様の期待に応えられるよう今後も研修・広報班一同務めてまいります。

《調査研究班》

調査研究班 櫻井 恭子（益子町）

調査研究班では、21年度22年度の2カ年にわたり「事業の多様化・分散配置における市町村保健師の在り方に関する調査」～連携についての一考察～をテーマに調査研究に取り組んでまいりました。

調査目的は、平成21年3月に出席した全国市町村保健活動連絡協議会の「多様化する市町村保健事業における保健師の在り方に関する調査報告書」に基づき、栃木県市町村保健師の置かれている状況や連携体制、統括保健師の配置状況、仕事への意欲・意識等について実態を把握し、各市町における分散配置された保健師間の効果的な連携を構築するための手がかりを得ることで保健師の職場環境や仕事への意欲・意識の向上に資することとしました。分析には自治医科大学看護部教授の春山先生にご助言を頂き、保健師間の連携体制の大切さや教育体制、職場環境の重要性が浮き彫りにされました。皆様のお手元に配布されましたらぜひ一読下さい。

第29回関東甲信静地区市町村保健活動業務研修会

「次世代へつなぐ保健師活動とは」～紡いできた保健師マインドをいかに伝承していくか～

平成22年11月18日(木)～19日(金)、宇都宮ポートホテルにおいて、第29回関東甲信静地区市町村保健活動業務研修会を開催いたしました。保健師業務の多様化と分散配置及び世代交代が進む中、地域保健活動を展開するうえで、どのように保健師活動のスキルを伝承し、次世代を担う保健師をいかに育成していくかを学び、今後の活動に資する機会となりました。2日間にわたる研修会の内容を一部ご紹介いたします。

基調講演

「これからの保健師に求められる専門性とは」

国立保健医療科学院 公衆衛生看護部 主任研究官 中板 育美氏

保健師の分散配置が進んでいるが、「地区担当」と「事業担当」の良いところを生かし、層の厚い保健活動をしていくことと、常に住民の健康を守るために働いていることを意識し、事業をうまく使いこなしてゴールを目指すことが大切である。

住民の価値観も多様化し、健康問題も単極的ではなく、高度化・複雑化してきている。現場らしい地区診断が求められており、保健師として「私が私の地区を何とかする」という当事者意識と、課題意識と目標設定・しっかりとしたビジョンを持って活動していくことが大切である。

保健師は活動していないといけない。地区活動を保健師活動の中核とし、地域とつながる。戦前も戦後も変わらず「健康の守り手である保健師は、幸せの守り手でもある」等等、保健師の専門性についてや、保健師活動の原点について、振り返り・再確認ができた講演でした。

中板育美先生 プロフィール

国立保健医療科学院 公衆衛生看護部 主任研究官

職種：保健師

平成元年から15年度まで東京都保健師、平成16年度より現職博士(看護学)

専門分野：公衆衛生看護活動論、母子保健活動、児童虐待



シンポジウム

「紡いできた保健師マインドをいかに伝承していくか」 ～保健師の人材育成～

総評

自治医科大学

看護学部 教授 春山 早苗氏

新任期の保健師にとって、先輩

保健師の仕事に対する熱意と、先輩からの日ごろの声かけが頑張れる源になっている。また、人材育成プログラムの中では、新任保健師が周りから認められ、次へのチャレンジ精神へつなげられるプログラムが大切。また、プリセプター自身、同じような教育を受けていないため、プリセプターを、横の糸・縦の糸で支えて行く仕組みが必要となる。その中でお互いに求められているもの、向かっていく課題が明らかになっていく。

今後保健師に期待されることとしては、自己啓発も重要。個別のケースを通し、関係機関とのネットワークを作っていくこと。そして、積極的に声を出していくことが求められている。

●「つながる工夫を一步ずつ」

神奈川県相模原市健康福祉局福祉部相模湖保健福祉課 主任保健師 室伏 由紀子氏
配属された部門に悩み考え方を変えた「ざわめ期」。やりたかった活動に取り組んだ「いきい期」。地区踏査しマップ作りをした「ひらめ期」。関係機関とつながりやりたいことが実った「はばた期」等現在にいたるまでの活動を語っていただきました。



●「県と市町村が連携した人材育成」～熊谷保健所の取組み～

埼玉県熊谷保健所 保健予防推進担当 担当課長 小島 貴子氏
人材育成を業務として位置づけ、プリセプターの配置とプリセプターを支援する体制の整備の必要性、そして、人材育成は相互に育ちあうものであると理解して取り組むことの大切さを教えていただきました。



●分散配置を乗り越えた人材育成

栃木県小山市役所 保健福祉部長 猿山 悦子氏
自治体保健師の60%を占める市町村保健師が、自らの活動や資質の向上を考え、声を国・県・関係機関に反映させていくことの大切さ、そして保健師自身、専門職としての自己啓発が求められていることを改めて実感しました。



●新任教育に期待すること

栃木県看護協会保健師職能委員長 中岡 容子氏
新任保健師の特徴としては、生活体験が少なく、個別の事例から集団・地域に発展させていくことが難しいため、体験を通して学ぶこと、個別のケースをじっくりと取り組むことがスキルアップにつながることを教えていただきました。



〈情報交換会〉

研修会1日目の夜に開催した情報交換会では、餃子や湯葉等栃木県の名産品を中心とした中華料理を食べながら、また皆で餃子体操やカクテルショーを楽しみながら、活発な情報交換ができました。



全保協活動報告

全国市町村保健活動協議会 会長 坂本 祐之輔氏

全保協は30年の歴史を節目に改革を進めます！

厚生労働省事業仕分けの影響により、平成23年度から間接補助金交付が廃止
改革にむけて「全保協あり方検討会」を設置

改革のポイント

1. 全保協は事業を精査し、平成23年度以降も存続
2. ホームページを開設。市町村保健師にむけて情報発信源としての機能を強化
3. 市町村保健師のための団体として明確化
地域をみる保健師のための団体として、市町村保健師の育成に努め、声を各関係機関に反映していく

特別講演

『小さな気づきと生きる力～専門性と「2.5人稱の視点」～』

ノンフィクション作家・評論家 柳田 邦夫先生



今どきの医療の現場における人の死の迎え方について、息子さんの脳死という実体験や様々な事例を通して、大切な視点「人稱性」についてふれる。「人稱性」とはどのようなものか、「死の理論」というものを例に挙げながら紹介。

- 1 人稱の死とは、自分自身の死であり、哲学的には存在しないが、死に至るプロセスのなかで臨時的には存在する。
 - 2 人稱の死とは、家族や愛する人の死であり、愛する人がこの世から消えてしまうことで亡くなったあとどのように生きるのかを問う課題である。
 - 3 人稱の死とは、知人、友人や親類など少し離れた存在の人の死で、家族の死ほどの悲しみではなく冷静でいられる。専門職業人として3人稱に傾きすぎれば冷たい、そっけない感じになり個別に手厚くサービスすることは難しい。しかし、100%2人稱になったらうつ傾向になったり、バーンアウトしてしまうので距離の持ち方が難しくなる。
- そこで、専門職業人としては3人稱だが2人稱になりきらず、知識や経験を生かしつつ患者や家族の患者の気持ちに寄り添い、乾いた3人稱の視点から潤いのある「2.5人稱の視点」をもつことが重要である。
- そして最後に、保健師は、地域の保健福祉を変え、安心福祉を与えるキーパーソンであるとふれ、エールをいただき、終了となりました。

柳田邦夫先生 プロフィール

1936年 栃木県鹿沼市生まれ

1960年 東京大学経済学部を卒業し、NHKに入局。14年間報道の仕事に携わった後、フリーの作家活動に入る。

現代の「いのちの危機」をテーマに、戦争、災害、事故、公害、病気などのノンフィクション作品や評論を書き続けている。最近では、終末期医療、医療事故、脳死問題、心の危機、言葉の危機、少年事件、絵本の重要性などについて、積極的に執筆と講演を行っている。

●●●参加者の声●●●

- 事務の業務が増えてくる中で、保健師の専門性とは何か、思い悩む時期に、援助専門職という言葉に感銘を受け、いかに住民の声を拾っていくか、地域の人・村とのパイプを作っていくか、今後、意識して活動していきたいと思います。
- プレゼンテーションの方法も学べた。分散配置の大変さや必要性を感じ、PHN 同士の学びの会も重要だと感じた。
- 毎日の業務で忙しいと、自分のことで精一杯になってしまい、改めて人を育てるという意識にはなれませんでした。今後世代交代をしていくうえで、新人教育や人を育てるということは、おろそかにしてはいけないと感じました。
- ともすれば業務をこなすだけの日常で、もっと訪問に出たいと思いながらも、パソコンの前で起案・報告・統計業務に明け暮れる毎日でしたが、これからは、現場力。私は私の地域を何とかしたいと思う目標ができました。
- 本当に心にしみいるお話でした。何度も泣けてしまいました。今後の業務の中で基本におきたいと思います。
- 2.5人稱大切にしていきたいと思う。現在、3人稱に偏っている自分の業務態度を反省しました。小さな気づきを大切にしていきたい。

〈実行委員長より〉

2日間にわたりまして、第29回関東甲信静地区市町村保健活動業務研修会を開催してきましたが、延べ465人の参加があり、多くの皆様にご参加いただき、誠にありがとうございました。また、栃木県保健師OB会つゆくさの会の皆様にも大勢参加していただき、重ねてお礼申し上げます。

それぞれの分野、各世代の方々のお話から、今後の保健師活動をしていく上で、多くのヒントがあったかと思えます。ぜひ、世代を超えて議論し、今後の保健師活動の参考にさせていただきたいと思えます。

第1回 研修会 平成22年5月21日(金)

講演会 「ガッテン流!『確実に伝える』ためのワザ、教えます。」

講師 NHK化学 環境番組部 専任ディレクター 北折 一 先生

自分の伝えたいこと、伝わるワザ持ってますか?



演出家の発想から、技を伝授してもらいました!
受講できなかった方も、受講した方もチェックして



伝える時のダメなモード、日常やっていないかな〜……

ダメなモード

- ◆「気をつけましょう」
- ◆「減らしましょう」
- ◆「頑張りましょう」

↓
「……しなさい」(命令と同じ)

- ◆ あ〜言えば、こう言う人に「でも…」は

物別れ



- ◆ 指導=受動的(してもらう) etc

とっておきのコツ

- 四つの感
『共感』『なんだろう感』『納得感』『お徳感』
- ネタより切り口
- 指導ではなく、支援
- 『認める』『褒める』
『はめる流れ』

導く戦略=作戦

導く戦略(作戦)は

おもしろい標語
サブタイトル 項目タイトル

受動態⇒能動態
(してもらう)(自分でする)
本人がしゃべる支援



志を明確化

死ぬほど考える⇒

どうやって、はめるか!
いい仲間と!笑いながら!

第2回 研修会 平成23年1月26日(水)

交流会 経験5年目未満の保健師交流会(グループディスカッション)

テーマ 『保健師の役割を考える』～保健師配置の機構図を持ちよって、日頃の悩みを話し合おう～

13市町から5年目未満の保健師が31名集まり、活気ある情報交換会を行いました。

日頃、話せない悩みや思いを打ち明けたり、夢あふれる思いを聞くことができ、刺激的な交流会が実施できました!中堅も長老も集まりたいな〜とつぶやいていた保健師がいました。横のつながりって、大切と再認識させられた研修でした。

アドバイザー 鹿沼市 斎藤真理子先生

参加者の感想

- 皆、それぞれ悩みながらも頑張っているんだなと…
きっと、先輩に頼っていいんだなと気づいた。
- 自分一人で考えすぎずに、難しいケースは仲間に相談して
いくことの大切さを改めて感じました。
- 日々の忙しさにおわれてパワーダウンしていたところ
でしたが、今日の研修で元気がもらえました。

- ・「うれしい」という気持ちは
人からもらうもの
- ・ 人と人との関係の中で仕事
するもの
- ・ 苦^{らく}⇔楽=楽しく仕事すること



編集
後記

関プロでの情報交換会也大いに盛り上がり、保健師のパフォーマンスやパワーの凄さを再確認しました。

今年は卯年!! 大きくした耳をすまして、飛んで・跳ねて・踊って・笑ってと楽に(楽しく)仕事ができますように……(青木 記)